



ぼくはネコなのだ
高野敦志

目次

ぼくはネコなのだ
あとがき

100 1

ぼくはネコなのだ

ぼくはネコなのだ。名前はまだない。どこで生まれたか何となく覚えてる。そこは薄暗くてじめじめした所。今住んでいるうちの物置の下だろう。何が悲しかったのか、ニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。

ぼくには家族がいる。しっぽの長い白と茶のまだらのネコが兄貴で、茶のシマシマのぼくとは全然似ていない。母ちゃんは三毛ネコだったのに、三匹ともまったく似ていない。どうやら母ちゃんは近所でも有名な美ネコだったから、引く手あまただったらしい。でも、違うオスとはめっこして、同時に子どもを

産み分けるなんて、母ちゃんもなかなかやるなあ。

兄貴にそっくりで立派なしっぽのネコが、通りを歩いているのを見たことがある。兄貴かと思ってニャーと声をかけたら、オヤジ顔でびっくりした。きっとあのおじさんが兄貴の父親なんだ。ぼくは自分の父ちゃんの顔を知らない。

母ちゃんに聞いたんだが、ぼくには妹が一匹いたんだそうだった。土砂降りが降った夏の日、かぜを引いてあっけなく死んでしまった。ぼくが泣いていたのは、自分も死にかかっていたからだそうだった。のらネコにはうちがないからね。

どうして、物置の下で生まれたかって？ 実は、母ちゃんは隣のうちで、えさをもらって暮らしていたんだそうだった。ところが、そこのおばあさんが引越してしまい、おなかはすくし、

あまやど
雨宿りするとところもなくなった。やむを得ず、別荘代わりにし
ていた隣のうちの物置の下で、ぼくたちを産んだってわけさ。
妹がどんなネコだったか、母ちゃんに聞いてみたんだけど、
忘れてしまったんだって。昔の人間とおんなじで、たくさん産
んでおかないと、大ネコになるまで生き残らないんだそうだ。
これが悲しい現実なんだね。

「さあ、引越しですよ」

物置の下で寝ていたら、いきなり母ちゃんに起こされた。兄
貴もねむそうな顔をしている。せっかく、屋根のあるところ、
といったも、床下に過ぎないんだが、カラスにいじめられない
寝床が見つかったというのに。

「おまえたちは人間のおいがするよ」

それを言われて、きよとんとしてしまったが、兄貴はくんく
んぼくの体をかいでいる。そう言えば、寝ている間に、手を差
し伸べてきた者がいたような。

「人間はえさをくれるんですよ」

食いしん坊の兄貴が言い返した。

「えさはくれるけど、まちがっても、知らない人間からもらっ
ちやだめなの。それはわなをしかけるためなのよ。私たちが
三味線しやみせんって楽器がくきにしてしまうんだから」

楽器がくきにしてしまうって？ 母ちゃんの話によれば、ぼくたち
はおなかの皮だけになって、ちりとでちんと曲をかなでるよう
になるそうだ。

「ニヤーニヤーだけじゃなくなるんだ」

いろんな音を鳴らせるなんて、何だかおもしろそうだ。そこで、三味線がどんな形をしているのか母ちゃんにきいてみたが、なかなか答えてくれない。

「本当は母ちゃんも、三味線が何なのか知らないんですよ」とぼくは言い返した。

「そんなの古い言い伝えに決まってるよ」と兄貴も加勢かせいしてくれた。

「親に口ごたえするもんじゃありません。三味線になったら、もうえさは食べられなくなるんですよ」

「それは困るよ。早くおまえも支度したくしろ」

兄貴にまで言われたんじゃ、しょうがない。ねむいけど、引

っ越しすることになった。

引っ越しと言っても、隣の町ではなく、数軒先すうけんさきに過ぎなかつた。生まれて間もない子ネコをつれてだから、大旅行などできるはずもないからだ。

そこには母ちゃんりの知恵ちえが働いていて、えさをくれそうなの人間を見つけたら、天秤てんびんにかけて、どちらが安全そうか、おいしい食べ物を出してくれそうか選ぶためだった。元のうちがまじだと分かったら、いつでも戻ってこようというつもりらしかった。

塀ひを越えて入ろうとしたときだった。ぼくらはとんでもない光景を目にした。まだ目が開いてもいない赤ちゃんネコを、棒ぼうがついた網あみでつかまえて、次々に箱詰めはこづにしているとところだつ

た。うちの前には車が止まっていて、無表情な顔した男が、子ネコたちを車の中に押し込んでいった。

「母ちゃん、あの子たち三味線になっちゃうの？」

「しっ！」

いきなりぼくは口をふさがれた。苦しくて泣き出すこともできない。家の主人とネコを運び込んだ男が話していた。気が遠くなりそうになったとき、人間が何を言っているのか分かってしまった。

「かわいそうだけど、この子たちはガス室行きです。母ネコがないネコは、一週間の猶予ゆうよを与えることもできませんから」

生まれてはじめて、ぼくは生き物が死ぬということを知った。

しかも、与えられた命を、いきなり奪うばわれることもあるということ。それはネコ事ことではないのだ。えさにありつけなければ、いずれぼくたちも……

とりあえず、ゴミ捨て場で食べ物をあさることになった。母ちゃんが網を持ち上げて、色白の兄貴が先に入った。上品じょうひんな顔して、何でもぼくちゃん一番じゃないと気がすまない。要するに、食い意地が張っているんだ。袋の中に魚の頭が入っていた。ビニールを食いちぎったとき、後ろうしろからさつき子ネコをつかまえたうちの主人が出てきた。

「こらっ！」

兄貴は自慢じまんのしっぽが網に引っかかってしまった。男は走りで近づいてくる。このままじゃ、あの子たちと同じ運命だ。

母ちゃんが必死に網を外そうとしている。間一髪で逃げ切り飛び込んだ先は、駐車場のある二階屋、ぼくらが生まれたうちだった。元の古巣に逆戻りというわけか。

兄貴とぼくが、階段を上って玄関の前、いつもえさが置いてあるところに飛び出したとき、「ガー！」っていう威嚇の声がして、白に黒縞のオヤジさんがこちらをにらんでいた。

「兄ちゃん、どうしよう」

普段は威張ってる兄貴も、毛を逆立てて尻込みしている。いつでも逃げられるようにして、ぼくを前に立たせようとする。

叫び声を聞いて、母ちゃんがぼくらの前に走り出た。

「ここはわたしたちが住んだところなのよ!」

「そんなこと、知らねえや。空き家にだれが住もうたって、他

ネコさまに文句を言われる筋合いじゃねえや。こっちだって、おまんま食い上げりやお陀仏よ。行き倒れのネコなんざ、車にひかれて煎餅だ。線香の一つもあげちやもらえねえぜ……」

ぼくは母ちゃんの陰で聞きながら、その口上に聞き入っていた。ネコの世界にも極道のおじさんがいるんだな。いわゆる「極ネコ」っていうのが。

「この子たちは何日も、ほとんどえさを食べていないんです。あなたにだってネコの心はあるでしょう？　こんな小さな子たちに譲ってあげようなんて気は起こらないんですか？」

「言うね。そりゃオレにだってネコの心はあるさ」

極ネコのおじさんは、意外に物わかりがよかった。えさの入ったお皿の場所からどくと、兄貴とぼくを玄関の方に入れてく

れた。

ぼくたちが頭突きしながら、えさにぼくついていっていると、何だか妙な具合ぐあひになった。母ちゃんの背中の方から、白に黒縞くろじまのオヤジさんののしかかり、母ちゃんが変な声を出しはじめたからだ。

「兄貴、母ちゃんがおかしいよ！」

「うまい、うまい。モグモグ……」

兄貴は食べるために生きているんだろうか。何だか情なさけなくなってきた。

それから母ちゃんと兄貴、ぼくの三匹に、極ネコおじさんの共同生活が始まった。とはいっても、えさの時間以外は、目を

細めてにらむおじさんの顔がこわくて、兄貴と一緒に通りの向かいの草むらに避難ひなんしていた。

そこにしつぽが長くて、白いライオンみたいに立派な毛並みのネコが、また通りかかった。

「あ、あのネコだ」

兄貴そっくりだけど、顔はおじさんだったから、起こして教えてあげようとしたんだけど、兄貴は日なたで引っ繰り返っていた。

「ぼくの父ちゃんはどこにいるんだろう？」

兄貴に問いかけると、ねむそうな目をこすって、他たネコ事ごとみたいに答えた。

「あの白に黒縞くろじまの極ネコ、母ちゃんと結ばれたみたいだから、

僕たちは連れ子になったんだよ。だから、義理のお父さんってわけさ」

えさの時間になった。おばさんが大きな袋から、乾いたえさを皿の中に移している。皿の数を見ると、二つしかない。母ちゃんとぼくたち兄弟、それに極ネコのおじさんで四匹なのに。

「ああ、どうしよう。こんなに増えちゃって」

おばさんは困った声を出している。えさを入れた皿を下に置くと、自分もしゃがんで、白い毛並みがきれいな兄貴に手を出している。若い男の子が好きなのかな。でも、ぼくはまだ人間がこわいんだ。だから、手を近づけられると、ガーと声を出して警告する。

「ねえ、母ちゃん。あのおばさん。ネコが増えて困ったって言

ってるね」

「あら、何であなた、人間の言葉が分かるの？」

その返事を聞いてたまげてしまった。母ちゃんも分からないのか。兄貴は？ と聞こうと思ったが、えさを食べる方に夢中で、なかなか答えてくれない。

「おまえは分かるんだ。へえ……」

口の中でもぐもぐしながらしゃべるから、ネコにも聞き取るのが大変なくらいだった。それにしても、何でぼくにだけ、人間の言葉が分かるんだろう？

「もう食べ終わったな。さあ、行った、行った！」

極ネコのおじさんが、ぼくたちを追っ払いにかかった。ぼく

はしゃべっていたので、まだほとんど口にしていない。

「ねえ、ぼくはまだ食べてないよ」

こういうとき、母親は子どものかばって、自分の食べる量を減らしても、子どもに食い分を譲ってくれるものなのに。あんまり自分の子どもばかりかばうと、極ネコおじさんからネコパンチを食らうのかな。それとも……。

「私もおなかやすいているのよ」

何て言う母親だ。おじさんと二匹で皿を占領して、子どもたちを追い出すとは。ぼくは腹へこのまま、すぐごと引き下がり、梅の木に登っている兄貴を見上げた。

「おい、おまえも来いよ！」

言われるままに、登っていった。近づくくと、兄貴が上の方を

指さした。

「ほら」

すずめが枝の先に留まっている。兄貴はおなかがいんどろろ。すきつ腹のぼくは、静かに忍び寄ったのだが、逃げられた。すると、別のすずめが、隣の枝に留まった。ぼくが近づくくと、また、逃げてしまった。

そのとき、ぼくは向かいの窓ガラスに、杖をついたおばあさんと、髪の毛の短いおじさんが並んでいるのを見た。人間がこわいぼくは、すぐさま梅の枝から飛び下りたくなかったが、兄貴はしっぽを振って呼び止めた。

「あの二人、親子だろ。人間はあんな年まで生きられるんだな」なるほど、おばあさんは白髪頭で、杖を握った手もふらつい

ている。ネコの世界では、自分の父親さえ知らないことが多いのに、まして、おじいさんやおばあさんがだれなのか、知ってるネコなんかいない。ぼくたちのらネコは、子供を何匹か作って、病氣したら、はい、さようなら。これから涼しくなり、寒い冬が訪れたら、ぼくと兄貴が生き残れるかも分からない。

「いつもえさをくれる女の人、だれなんだろう？ 夫婦かな」
「さてね。よそのうちじゃ、いそがしそうにしてるけど、ずいぶんのんびりしてるじゃないか。いいご身分だよ」

兄貴はクールなたちだから、えささえもらえれば、どうだつていいんだろう。枝にしがみついたぼくを追い越して、一気に地面に着地した。あんな高さから飛び下りる勇氣なんか、今のぼくにはない。

「おい、ついて来いよ」

通りを渡って、向かいの草むらに入ってしまった。迷路のような中を、頭を下げたり、引っかかる茎を足から払って、兄貴についていくのは容易じゃない。

「待ってよ。何でこんなことしなくちゃならないの？」

息を切らして登っていくと、草の茂みが切れて、ぼくたちの住む二階屋が見下ろせる高台までやってきた。

「パトロールしなくちゃいけないんだよ」

「パトロールって？」

「ここがぼくたちのなわばりってことさ」

そう言いながら、兄貴はしゃがんでおしっこをした。ぼくもまねっこして、連れションしていると、二階屋の前にワゴン車

が止まるのが見えた。杖をついたおばあさんが、息子らしいおじさんに手を引かれ、車の前に出て行った。

「何してるのかな」

「さあ？」

おばあさんは車で行ってしまった。少しして、おじさんも自転車で出かけていった。

夕食の時間になった。おばさんが玄関からえさを出したので、兄貴とぼくが近づくと、極ネコのおじさんが出てきて、ぼくたちを追っ払いにかかった。

「ねえ、母ちゃん。おなかすいた！」

兄貴が構かまわず出ていくと、おじさんは「ガー」と威嚇いかくの声を

出した。ついで、母ちゃんの一言ひとこと。

「早く、あっちに行っちゃいなさいよ」

ぼくは耳を疑たった。母ちゃんと姿すがた形かたちは同じでも、別なネコの魂たましいでも取り憑ついてしまったのだろうか。おなかのあたりを見ると、最近大きくなってきたみたいだ。子供にろくに食べさせないで、皿いっぱいいっぱいのえさを、極ネコおじさんと山分けしているのだから。

「ほんとにうるさい子だね。もうおまえたちなんか、産んだこと忘れたよ」

ぼくはショックで、身みぶるいしてしまった。普段は鈍感どんかんな兄貴も、毛を逆立てると、お尻を山のように盛り上げた。これは母ちゃんから発はせられた、兄貴とぼくに対する縁切りせんぎ宣言なん

だろう。

兄貴とぼくは、空あき家となつて隣のうちの、二階のベランダへと移動した。ここではえさはもらえないから、二匹だけで食べ物を探しにいかなければならぬ。

「ぼくたちどうなるのかな」

「えさが食べられなければ、三味線にされなくても、骨ほねと皮だけになつてしまふだろうな」

この近所には、ネコを目の敵かたきにしてゐる人間もいるから、うろうろしているだけでもあぶない。生まれたばかりなのに、どうしてつらいことばかりあるんだろう？ ぼくは生きてゐるのがいやになつた。

「兄ちゃん、どうしたら死ぬるんだろう。このベランダから飛び下りたら死ぬかな」

「くるりと回つて、ひらりと着地してしまふよ」

「じゃあ、断食だんじきしようか」

「えさが見つからなければ、死にたくなくても断食だ」

「もっと手軽てがるな方法は？」

「わざとつかまって、ガス室で死ぬかい？」

「そんなの、いやだ」

「悩んだってしかたないさ。あしたはあしたの風が吹くついでうから」

雨が降つてきた。それに風も吹いてきた。ひさしの下だと、

雨粒あまつぶがどうしても降りかかる。兄貴とぼくは、閉められたままの雨戸あまどの外でふるえた。しかも、えさを食べていないから、余計よけいに身にこたえる。

「物置の下の方がよかったかな」

「今から移動したらびしょぬれだぞ」

「でも、雨は降りかからないよ」

「降り続けば、あそこは水たまりになるからな」

床下で死んだ妹のことを思い出した。ぼくがふるえているので、毛が長い兄貴が外側になって、しずくが降りかかるのから守ってくれた。

「つらいんだったら、寝てしまったっていいんだぞ。おれが起きてやるから」

兄貴のことを食いしん坊だとか、鈍感だとか言ってた自分はずかしくなった。日が暮くれて少しすると、雨はあがったようだった。寝ぼけながら、ぼくは体温つづに包つまれながら、兄貴の寝息ねいきを聞いていた。

夜が明けた。夏の太陽が照てり出して、ぬれた体も乾いてしまった。セミがけたたましく鳴いている。あの虫でもつかまえたら、腹たの足たしになるだろうか。

寝ぼけた目をこすっていると、兄貴が耳もとでささやいた。えさにどうしたらありつけるかという相談だった。

「おれがあのおヤジを挑ちやうはつ発はつするから、そのすきに皿の一つを運び出すんだよ」

「でも、母ちゃんにじゃまされるに決まってるよ」

「向こうはもう、母親じゃないって宣言せんげんしてるじゃないか。構いやしないさ」

玄関からおばさんが、皿を二つ持って出てきて、あたりを見回しながら下に置くと、うちの中に戻っていった。極ネコと母ちゃんがばくつき始めたとき、兄貴がえさに向かつて走っていた。

「何を！ 小僧こぞう、まだいやがったのか」

極ネコは怒鳴りつけると、突進とっしんした兄貴の首根くびねをつかんだ。兄貴も負けじと、腹に蹴りを入れる。そのすきに駆け寄り、皿の一つをくわえて持って行こうとした。

「このドロボーネコ！」

母ちゃんの叫びに、びっくりして皿を落としてしまった。えさは地べたにまき散らされた。ぼくはこぼれたえさを食べ始めた。

そのとき、玄関からおばさんが飛び出してきた。兄貴が極ネコに殴なぐられ続けているので、やめさせようとしたが、取っ組み合いは止まりそうもない。

「お兄ちゃん！ お兄ちゃん！」

叫び声を上げると、うちの中から髪の毛の短いおじさんが出てきた。でも、何もしないで突っ立っている。今度はおばさんが怒り出して、「もう、ほんとに！」と言いながら、そうじのホウキを手にとって、極ネコの背中をたたいた。極ネコが逃げ出すと、おじさんが母ちゃんの方を追ったので、二匹とも大あわて

で庭から通りに出ていった。

その間、ぼくはこぼれたえさを食べ続けていた。だって、ほんとにおなかやすいでいたんだもん。

おばさんは空からになった皿を手にとると、うちの中から袋を持ち出してきて、少なくなつた分を足してくれた。これで兄貴もようやく、すきつ腹はらを満たすことができるというわけだ。

人間も立ち去り、えさも食べてしまうと、兄貴はぼくの顔を見上げて言った。

「あのおばさん、何って言ってたんだ？」

「お兄ちゃんって言ってたよ」

「あの年で兄ちゃんもないもんだ。夫婦じゃなかったんだな、あの二人……」

ぼくはもう若くない兄と妹、それに母親らしいおばあさんが、どうして同じうちで暮らしているのか分からなかった。

「それで、母ちゃんと極ネコおじさん、どうなるのかな」

「戻ってこないだろ。おばさんはおれら子ネコを選んだってわけさ」

「何でこうなったのかな？」

「天佑てんゆう、天の助けっていうやつさ。おてんとうさまが助けてくたさったんだよ」

兄貴にしては、難しいことを言うんだなと感心して、まぶしいお日さまをしばらくおがんでいた。

ようやく、ぼくたち兄弟の安住あんじゆうの地が決まった。放浪ほうろうなん

かする必要はなかったのだ。生まれた場所に住めと、おてんとうさまがおっしゃってるんだろう。朝と夕方、兄と妹らしいおじさんかおばさんが、皿いっぱいのおえさと水を運んで来てくれるわけだし。

また、おばさんは段ボールの中にふとんを敷いて、兄貴とぼくが寝るところまで作ってくれた。おばさんは兄貴がお気に入りらしいからな。サービスがよすぎるのは危ない気もしたが、これからは朝晩、ひんやりしてくるし、玄関の端で丸くなってよりまじだった。

このうちが好きになったのも、庭に植木がたくさんあるのと、草花のしげみがあるという点だった。梅とか柿の木は木登りするのと、爪をとぐのに便利だった。爪は高いところに登るとき、

岩に打ち込む杭みたいなものだし、ネズミや小鳥をつかまえるとき、イヌなんかに襲われたときの武器にもなるのだ。草のしげみは兄貴と鬼ごっこするときの隠れ家や、庭で見つけた宝物を隠す秘密基地にもなるからだった。

ネコはどんな人間が好きかって？ イヌと違ってネコは、自分が主人で人間を召し使いだと思ってるとか、ネコは自分勝手だから、だれがおいしいえさをくれるか、はかりにかけてるとか。それって自分たちの思い込みを、ぼくたちネコに当てはめてるだけじゃないか？

そりゃあ、えさをもらえるかどうかは大切だよ。食べなきゃ生きていけないからね。だからといって、おいしいえさをくれ

るから好きになるなんて、言いがかりに過ぎない。ぼくたちネコにも、好きになれる人間となれない人間がいるんだ。

このうちに住んでるおばさんは、動物の扱いあつかに慣なれているから、兄貴はすっかり心を許してしまった。棒の先にひもをくくりつけて、ネコじゃらしとかいうオモチャを作り、それを鼻先に近づけるものだから、兄貴はもう夢中で、甘あまったれた声まで出している。

だけど、ぼくはまだよく分からない。おばさんによく怒られてるおじさん、どうやらおばさんのお兄さんは、ネコとの付き合いは下手へたなんだけど、悪い人ではないみたいだ。離はなれた位置で座ってるぼくの方を見て、にこっと笑って眺ながめている。手にはいい匂においがする肉の棒を持っている。ぼくと遊あそびたいのかな。

でも、やり方が下手だから、えさで釣つるしかないんだね。

夏も終わりだった。うるさく鳴いていたセミも、地べたに転がりひっくり返っている。ぼくがちよっかいを出すと、そいつは羽をばたつかせるが、もう飛び上がる元気はない。ぼくはそいつをしばらくこづいて、狩かりの練習をする。動きがぶくなくったところで、おやつおやつの代わりに食べてしまう。歯は応こたえばかりで、うちのおじさんがくれる肉棒みたいに、おいしくはないけどね。

兄貴とぼくは、その日も東側にある高台に、パトロールに出かけていた。草むらを出入りしているうちに、兄貴の姿を見失った。一匹になったので、自分のなわばりを広げるために、少

し遠出とおでしてみることにした。ぼくを見捨てた母ちゃんのことも気になったし、自分の父親と出会えるかもしれないし。

歩道から見下ろすと、低くなつた広場で、白い服を着た人間の子供たちが、笛ふえの合図あいずででんぐり返しをしたり、箱に手をつきジャンプしたりしていた。笛を吹いている男の人は、あの子供たちの父親なんだろうか。それにしても、子供たちの運動が下手なのにはあきれた。まっすぐ回転できなかったり、箱の前で急に止まってぶつかり、中には急に泣き出す子供もいる。

「あれが学校というものか」

この辺は子供が多いのも納得なつとくがいった。子供がカバンの中に、パンを持っていると母ちゃんが言つてた気がするが、人間の中で子供ほど、本性ほんしやうの分からぬ生き物もないそうさ。腹をす

かしてしゃがんでいると、頼んでもいないのにパンを差し出す。食べようとして近づくと、首根っこをつかもうとする。何をされるか分かつたもんじゃやない。

運動もろくにできず、弱い者いじめをする人間だからこそ、学校というものに通わなければ、まともな大人おとなにはなれないんだらう。その間、子供たちの親は仕事をしていられるわけだし。えささえたくさん食べていれば、大ネコおおになれるぼくらとは大違ちがいなのだ。

もし、ネコにも学校ができたなら、人間よりよっぽど高等な生き物になれるだらう。だとすると、笛を吹いて子供たちを訓練くんれんしている男の人は、人間の中ではすぐれた種族しゆぞくに属ぞくするんだらう。箱を飛ばうとしてお尻を打つた女の子が「先生！」と言つ

て泣き出した。そうか。あれが「先生」という種族なんだな。

「兄貴はどこに行ったんだろう」

ぼくはニャーニャー鳴いてみたが、一向いっこうに返事がない。心配になってあたりを探してみることにした。もしかして、「ネコのいい」兄貴のことだから、えさにつられて悪い奴のわなにでも引っかけたんじゃないか。

探し回っているうちに、自分がどこにいるのか分からなくなった。草むらの中で周りまわが見えない。子供こどもの声も聞こえない。そのうち、雨が降り出した。しかも、大粒おおつぶの雨である。おてんとうさまはどこへ行ったんだろう。ちよつと待って下さいと言ったが、ますます降り方は激はげしくなる。冷たくて体がふるえる。

目の中に雨が入って、よく見えなくなつた。

何とかうちにとどり着いたときには、すっかり「ぬれネコ」になつていた。駐車場には髪の毛の短いおじさんが立っていた。うれしくなつて駆け寄ると、おじさんはすっかりぬれたぼくを玄関まで抱だいていき、乾いたタオルでふいてくれた。そこにはすでに、毛をふいてもらった兄貴もいた。二匹だけになつたとき、兄貴がぼくに向かつて言った。

「あのおじさん、おまえのこと探して、雨の中、ずっと歩き回っていたんだぞ」

庭の柿の実が赤く色づいてきた。おばさんに、髪の毛の短いおじさん、それにおばあさんという奇妙きみょうな家族に、ぼくもだんだん親した

しみが持てるようになった。ここのうちにすみついてよかった。朝晩もかなり冷えるようになったし。

普段爪とぎしている柿の木も、葉がたくさん落ちるようになった。ひなたぼっこしながら、兄貴にきいてみることにした。

「あの赤い実、食べられるのかな」

「分からないな。おれらには母ちゃんがないから、教えてもらえないし」

そのとき、カラスが飛んできて、いちばん赤い実を食べはじめた。半分ほどのみ込んだところで、下に落として飛んでいった。すぐさま、兄貴は赤い実に食らいついた。

「うまい、うまい、こいつはうまいぞ」

それを聞いて、ぼくは木に登って、だいぶ赤くなってきた実

を下に落とした。ちよつと固そうだったが、兄貴の真似して食べてみた。

「何だ、こりゃあ！」

しぶくてしぶくて、舌がしびれそうだった。もう柿なんか食うもんか。

「おかしいな。オレが食べたのは甘かったよ。種しか残ってないけど、ちよつとなめてみるよ」

言われままになめてみたが、本当に甘い。どうやら、カラスには甘い実が分かるらしい。

「だから、人間はカラスのこと、カアちゃんなんて呼ぶんだな」
ぼくが言ったことに、兄貴はぼかんとして首をかしげていた。

毎晩冷えるようになったなと思つていたら、玄関先に新しいネコ小屋ができた。雨が吹っかけても大丈夫なように、プラスチックとかいうぬれない材料で作られている。体重の重たい兄貴がのつても、ダンボールみたいにへこまない。

しかも、夜になると中に湯たんぽを入れてくれた。これは本当ありがたいがたかった。ぼくたちネコのふるさとは、遠い遠い南の国だから、北の国がふるさとのイヌとは大違いなんだ。これ以上寒くなったら、病気になるんじゃないかと心配していたし。でも、ちよつとサービスよすぎる気もするが。

ある日の夕方、柿の木の前で兄貴と追っかけっこしていたら、すうつと裏口のドアが開いた。おばさんが顔を出して笑つている。普通ならすぐに閉めてしまうのに、開けたままにしている。

そしたら、好奇心が強い兄貴が、恐る恐る入つていった。ぼくも入つてみたいと思つたけど、何をされるか分からないから、迷つていたら、ドアを閉められてしまった。

日が暮れた頃、裏口のドアが開いた。出てきた兄貴はねむそうな顔をしている。口に鼻を近づけたら、何やら肉のにおいもある。

「中はすごいぞ。おれらのオンボロ小屋とは大違いさ。夜になったのに、昼間みたいに明るいし。暖かい風が出てくる箱まであるんだ。おやつもらつて、箱の前に座っていたら、気持ちよくなつて寝てしまったよ」

ぼくはうらやましかつたが、裏口がまた開く気配はない。し

かたなく、プラスチックのネコ小屋に入ろうとしたとき、玄関が開いておばさんがえさを出してきた。容器の中に口を突っ込んで。でも、兄貴の口のおいとは違う。おなかが減ってるから食べはじめたけど、兄貴はいつもと違うようだ。

「オレ、おやつ食べ過ぎたみたいだ。こんな乾いたえさなんかより、ジューシーな肉のほうがうまいぞ」

その話聞いたら、ぼくは我慢がでなくなつた。柿の木の上に登ると、台所の屋根の上に飛び下りて、わざとジャンプしたり、地団駄を踏んだりした。

「開けろ、開けろ、ドア開けろ。おいしい物を食べさせろ！」

ぼくが柿の木と屋根の間を、行ったり来たりしていると、お

なかがいっぱいのはずの兄貴まで一緒になって、屋根の上で飛び跳ねるのだった。体の重い兄貴がジャンプしたのだから、家の中はどれだけ騒がしかったことだろう。

裏口から髪の毛の短いおじさんが出てきた。柿の木の下から見上げている。ぼくが柿の木に飛び移ると、兄貴も屋根の端から顔をのぞかせ見下ろしている。

「ほんとに、こいつら中に入れろって言ってるよ」

おじさんが開けっぱなしのドアに向かって言った。すると、おばさんに手を引かれたおばあさんが、よろよろしながら顔を見せた。

「あらまあ、本当に生きてるわ」

しわだらけの顔は笑っていない。おばあさんは、ぼくたちの

こと、あまり好きじゃないんだなと思った。兄貴も柿の木に移ってきて、とまどっているぼくを尻目しりめに地面に飛び下り、おばあさんの横をすり抜けると、さっとうちの中に入っていた。ぼくもあとに続いた。

「やっぱり外は寒いのよ」

おばさんが言った。奥まで進むと、兄貴の言っていた暖かい箱が見えた。近づいていくと、おじさんがにこっとして、いい匂いがする肉の塊かたまりを差し出した。ぼくにくれるのかと思ひ、恐る恐る近づいていくと、今度もまた兄貴に食べられてしまった。

「ひどいよ、兄ちゃん！」

ぼくは思い切り不満の声を上げた。

すると、おじさんがすぐに、ぼくの口もとにも、肉の塊を差し出してくれた。頭の中がおいしい味だけになった。思わずのどを鳴らしてしまった。

おばあさんが立ち上がった。つえをついて歩き出すと、「あつ、いっつ」と言った。顔がこわくなったから「痛い」という意味なのだ分かった。

「あつ、いっつ、あいつ、あいつはどいつ？」とおじさんが歌い出した。

しばらくして、またおばあさんが戻ってきた。今度は「あつ、いてえ」と言った。

「あつ、いてえ、あつ、いてえ、だれに会いてえ」

ぼくはおかしくなって、ニヤーニヤー笑ってしまった。兄貴

は「何がおかしいんだ？」と首をかき上げていた。

おじさんがテーブルの上に、何やら紙をたくさん広げている。

「あしたは何時から授業じゅぎょうなの？」

「大学は昼過ぎからだよ」

だから、おじさんはいつも、のんびりしているのか。どうやら、大学とかいう学校は、教える方も教えられる方も、寝ぼすけが多いと見える。丘の上で子供たちを教えていた学校とは、ずいぶんレベルが低そうだった。

おばあさんは元の席に座ったのだが、何やら機嫌きげんが悪そうだった。というより、明らかに怒っている。

「私は大学の先生なんだから！」

おじさんとおばさんが顔を見合わせて笑った。やっぱり、お

ばあさんは少し、話していることがおかしい。先生だつていうのは嘘うそのようだったし、もしおばあさんでも務つとまる仕事なら、よほど子供の数が少ない学校なのだろう。

こうしてぼくたち兄弟は、奇妙な家族が住むうちに出入りでいりするようになった。とはいっても、一定の時間がたつと、台所のドアが開けはなされた。その理由について、ぼくなりに考えてみた。

要するに、この家の中にはトイレがないのだ。まあ、おばあさんが一定時間、重い腰を上げて、「あいつ」とか「会あいてえ」とか言いながら、部屋を出入りではいしているところを見ると、人間のトイレはあるらしいのだが、肝心かんじんのネコ用トイレがないのだ

った。

ぼくたちがオシッコをするのは、単におなかが苦しくなつて、すつきりするためだけではない。ここは自分のシマだと、他のネコに知らせる意味があるのだ。

この部屋に住み込むなら、部屋の中でオシッコをしなければならぬのだが、どこにしたらいいか分からないし、むやみにしたら二度と入れてもらえない気がした。そこで、おなかが苦しくなると、ドアの方に近づいて「ニャー」と鳴く。すると、おばさんがドアを開けてくれるから、今だとばかりに、ぼくたち兄弟は外に逃げ出すのだ。一晩も家の中に泊まったことがないのは、そうした理由によるものだと思うのだ。

家に髪の毛の短いおじさんが、一人で留守番るすばんしている日があった。おばさんとおばあさんは、どこかに出かけていた。そのうち、おじさんまで出かけてしまった。今日の夕食はどうなるんだろうと、兄貴と話しあっていたら、おじさんがだれか連れてきた。おじさんが二人になつてしまった。新しいおじさんは、ほつぺたが赤いくまの絵が描かかれたシャツを着ていた。「くまモン」という言葉が聞こえてきた。どうやらそのくまの絵のことらしい。そこで、くまの絵のシャツを着たおじさんを、「くまモンさん」と呼ぶことにする。

「あつ、ほんとだ。かわいいね」

くまモンさんはネコ好きらしい。ぼくと兄貴の方を見くらべている。ぼくはこわくなつて、少し離れたところに座っていた。

すると、くまモンさんはおなかの毛が白い兄貴の方ばかり見ている。

「毛の色は違うけど、白いネコの方がイオに似ているな」

「イオって、木星の衛星イオからつけたの？」

「火の国にびったりだと思ってるね。イオは白と黒のまだらネコだったけどね」

くまモンさんがしやがんで手を伸ばした。すると、兄貴は自分の方から、くまモンさんのひざの上に乗った。ぼくは目を疑ってしまった。初めて会った相手でも取り入ろうとする、兄貴のそういうところがいやだと思った。

「実はね、イオを飼う前に、そっくりのネコを飼っていたんだ。そのネコは外で飼ってたんだけど、ある日を境にいななくなっ

てしまったね。ネコは人目を避けて、ひっそり死ぬって言うからね。それからしばらくして、のらネコが二匹の子ネコをつれてうちに来たんだ。似ている方の子ネコをうちの中に入れたら、母ネコが怒ってるね。網戸を破ってうちに入ってきたんだ」

それを聞いて、ぼくはうらやましくなった。おなかに子供が出来たからといって、ぼくたち兄弟を追い払った母ちゃんとは大違いだったから。

「イオには兄弟がいたってわけさ。ただ、うちで三匹飼うことはできなかったから、知人に母ネコともう一匹の子を飼ってもらったんだ」

兄貴と離ればなれにならなかつただけでもよかった、とぼくは思った。その間も、くまモンさんに頭をなでられてた兄貴は、

うれしそうにのどをゴロゴロ鳴らしていた。

「イオはとても頭のいいネコだったんだ。人の気持ちを讀むのが上手で、こちらがさびしいときは寄り添ってくれるし、いそがしいときはそばで見守ってくれた。魚が大好物で、サンマなんか焼いていると、目の色変えて飛んできたっけ。イオは死んでしまったけど、生まれ変わりのネコがいるんじゃないかって、いつも探しているんだ」

くまモンさんはやさしい人なんだなと思った。そこで、ぼくも仲よしになりたくて、プレゼントをあげることにした。庭の中を探し回って、一匹のトカゲを見つけると、おやつにしてもらおうと、くわえたままくまモンさんに差し出そうとした。

その途端、くまモンさんは「ギャツ」と叫んで逃げ出した。

その拍子に、兄貴はくまモンさんのひざから転げ落ちてしまった。

夫婦げんかはイヌも食わないって言葉が、人間の世界にはあるらしい。もちろん、ネコだって食わないよ。おいしくない物だったら、おなかが減っても食べない。まあ、今は黙っててもえきが出てくるから、こんなこと言ってられるだけかもしれないけれど。

おばさんとおばあさんが、うちに戻ってきた日の夜、うちの中から激しい言い合いの声が聞こえてきた。これは夫婦げんかなどではない。もう若くはない兄と妹のけんかなのだから。

「だから、おまえは〇〇がしんじまってもいいって言ってるん

だな！」

「よくもまあ、そんなこと言えるわね！」

続いてドアが思い切り閉められる音がした。ぼくと兄貴は、柿の木の前で耳を傾けていた。くもりガラスを通して、おぼさんならしい影が通り過ぎるのが見える。でも、意味が分かるのはぼくだけだった。兄貴は退屈たいくつしたのか、木の幹みきで爪をときはじめた。

「兄ちゃん、しんじまってもいいとか言ってるよ。もしかしたら、ぼくたちのことかもしれない……」

「何言ってるんだ。おまえ、ちよつとばかり人間の言葉が分かるようになって、いい気になってるんじゃないか。ネコの言葉も十分に話せないくせに。すんじまってるっていうのは、食事が

すんでしまった。ごちそうさまってことなんだよ。おれもたらふく食ってみたいもんだよ」

それから数日は、何事も起こらずに過ぎていった。ぼくは何かこわくなって、うちに入っていく気がしなかったが、兄貴は部屋の中の暖かさに負けて、うちの人が寝るまで入りびたりになっていた。その間、ぼくは玄関前の小屋に入れられた湯たんぽの上で、丸くなっていたのだが。

ある日の朝、女の人の話し声が聞こえてきた。おぼさんが同性の友達を呼んできたらしいのだ。ひそひそしゃべっているの、ぼくは耳を澄ましていた。どうやら、ぼくらのことを話しているようだ。どちらがおとなしいだの、どちらが警戒心けいかいしんが強

いだのとしやべっている。

空気が冷たいので、ぼくは湯たんぽに座ったまま、隣の小屋にいる兄貴に向かって話しかけた。

「兄ちゃん、気をつけてね。何か支度してるみたいだから」

「えっ、食べる支度かい？ けさはいいにおいがするなあ」

真新しい鉄のかごが正面しょうめんに置かれ、中には乾いた普段のえさではなく、生々しい肉の塊が置かれている。においの正体はそれだったのだ。その途端、兄貴はかごの中に駆け込んでいった。

「ああ、ダメだよ」

言おうとしたとき、湯たんぽが入った小屋のふたまで閉められてしまった。ぼくはまだ寝てるらしいおじさんに向かって叫

んだ。

「助けて！」

プラスチックの小屋に閉じ込められたまま、ぼくは車の後ろに乗せられたらしい。薄暗い中なので、ほとんど何も見えない。鉄のかごの音もしたから、兄貴も横にいるんだろう。ブルンブルン音がしている。このままどこかに連れていかれるに違いない。

「兄ちゃん、ぼくらは三味線にされちやうのかな」

「おまえ、三味線になってちりとてちんつて、おなかで鳴らしたかったんだろ」

「じゃあ、おなかの肉はどうなるの？」

「肉なら食べられるかな」

「えっ？ 何に食べられちゃうの？」

「生で食べるか、焼いて食べるか。どこがおいしいかな」

「兄貴も食べられるんだよ」

「えっ？」

車が止まった。鉄のかごが運ばれていった。ドアが開く音がしたとき、兄貴は「じゃあ、おれから先に食べられるらしいから」と言い残して消えた。

いよいよぼくの番らしい。ふたが開けられると、白い服を着たおじいさんが、目の前に立っていた。正面の鉄のおりの中では、ぐったりした兄貴が横たわっていた。

「兄ちゃん！」

叫ぼうとしたとき、おじいさんが「押さえてください」と言った。押さえた手は何と、いつものおばさんである。やっばり、そういうことだったんだな。針のついた管くだをぼくの体に突き立てた。激しい痛みが続いて、しびれが全身くたに広がっていく。ああ、これでぼくもお陀仏だ。神さま、仏ほとけさま、招まねきネコさま、来世らいせいに生まれるときは、自分の子孫が残せますように……

ぼくは死んでしまったのだろうか。気がつくと、髪の毛の短いおじさんと、あのおばさん、それに母親らしいおばあさんのうちに戻っていた。ぼくの体はもう三味線になってしまったのかな。三人は何にもなかったように、笑ってるじゃないか。ずいぶん

ひどい話だ！

横にはねむそうな顔した兄貴がいた。二匹とも化けネコになつてしまったのかな。化けて出たにしては、ずいぶんかわいい顔をしている。

「兄ちゃん、ここは地獄なの？ それともまだ、三途の川は渡つてないのかな」

「何だか悪い夢でも見ていたようだ。こうして前足も、後ろ足もついている。頭もついてなきや見られないだろ。生きてることは確からしいが、何かが足りないんだ」

「お兄ちゃん、ひどいこと言つてたけど、無事にすんだじやないの。〇〇したんだから、あの子たちはかわいいままでいられ

るのよ」

おばさんが何かしたと言っているんだが、よく聞き取れない。悪い夢を見てからは、兄貴とぼくは以前よりも仲よしになった。うちの中で互いに毛づくろいをして、体中のほこりをなめて取るのだ。

「ぼく、前よりも兄ちゃんが好きになっちゃった」

そう言いながら、おなかのあたりをなめていたら、兄ちゃんの金玉がなくなつてることに気がついた。

「兄ちゃん、大変だよ。もう皮ばかりの種なしぶどうになっちゃったよ」

「おまえのもなくなつてるぞ。何か足りないと思つてたけど、そういうことだったのか」

「ひどいよね。自分たちが子どもが作れないからって、ぼくたちまで道連れにするなんて」

「いや、子ども作れないなら、かえって好都合かもしれないぞ。最近にんしんは妊娠にんしんしたくないメスが増えてるって言うし」

その言葉を聞いた途端、ぼくの体の中で、抑えきれない欲望が生じた。兄貴の体を後ろから押さえて、馬乗りみたいに乘っかるうとした。兄貴はいやがって逃げ出した。

「おれ、そういう趣味はないんだ」

「兄ちゃん、お願いだから、ちょっとやらしてよ！」

もう真冬になった。肌はだを刺さす冷たい風が吹き、昼間でも日陰はふるえるほどだ。そのため、部屋の中にネコ用のトイレが作

られた。ぼくらが用を足した所の土を入れたので、丸い容器が何であるかすぐに分かった。ぼくたちネコはきれい好きだから、あたり構わず糞ふんや小便をまき散らす、鳥なんかと一緒にされたくない。あいつらはぼくらのおやつに過ぎないわけだし。

トイレが出来たおかげで、ぼくらは夜中になっても、部屋の中でぬくぬくしてられるようになった。外の湯たんぼでふるえてることもなくなった。寒くなると出でぶし不精しょうになるのは、ネコも人間も同じなんだな。

おばさんとおばあさんが寝てしまっても、おじさんは暖かい部屋で起きている。日によつては、夜明け近くまで明かりをともして。といつても、半分はうつぶして居いねむりしてるのだが。兄貴の方を見ると、ソファの上で丸くなっている。いい気なも

んだ。

ぼくがテーブルの端からのぞき込むと、文字がたくさん並んだ機械きがいを、おじさんは指で押している。初めは何をやってるのか分からなかったが、どうやら人間の言葉を書く機械らしい。何を書いているんだろう。大学とかいう、休みだらけの学校の先生らしいから、教えるための書類でも作ってるのかと思った。文章を書き上げたところで、おじさんがボタンを押すと、何とその機械から男の声が聞こえてきた。

ぼくはネコなのだ。名前はまだない。どこで生まれたか何ニヤンとなく覚えている。そこは薄暗くてじめじめした所。今住んでいるうちの物置の下だろう。何が悲しかったのか、ニ

ヤーニヤー泣いていたことだけは記憶している。

何だ。この先生、ぼくのこと、話に書いて遊んでるらしい。ニヤン「何となく」とか、ネコ真似までしている。ネコのこと勝手に書くんじゃない！ ネコごとだと思って。ちよっと仕返しをしてやりたくなかった。そこでおじさんがトイレに行ってる間に、機械の上に乗っかって踊ってみた。すると、白い画面に文字が出てきたから、踊りながら人間の言葉を書こうと思った。

しばらくして、髪の毛の短いおじさんが出てきた。ぼくはあわてて機械の上から飛び下りた。それを見ておじさんは、不機嫌ふきげんそうに顔をゆがめた。そして、ぼくの顔をじっと見ながら言った。「自分のこと書かれて怒ってんだろ。仕返しでもしたつもりな

んだろ」

その言葉を聞いてぎよつとした。ただ怠け者の先生だとばかりと思っていたが、ネコの心を読むこともできるらしい。ちよつとこわい気もしたが、それならこつちにも考えがあると思つた。

雪がちらつく寒い日も、ぼくと兄貴はうちの中で過ごすようになった。テーブルのある大きな部屋は、ドアが閉められていて、その先に何があるか分からない。一度だけ、おばあさんがトイレに行くとき、一緒に出たことがある。階段があるから上にも部屋があるようだけど、すぐにおばさんに抱きかかえられて、元の部屋に戻されてしまった。

でも、うちの中にばかりいると、体がなまってしまう。筋力も落ちてしまう。それに、大切な玉を抜かれてしまって、自分がオスだかメスだか分からなくなりそうだ。オスであることを忘れないように、少しスポーツしなくちゃいけない。ただ、昼間はおとなしくネコをかぶつてることにした。おばあさんは本当は、ぼくらのこと好きじゃないらしいから。

「早くこのネコ、袋に入れてしまいなさい」なんて言っている。

夜遅くなり、おばさんとおばあさんがいなくなると、ぼくらもいったん寝てしまう。しばらくして目を覚ますと、ぼくはお尻を持ち上げて背筋を伸ばしたり、足を前に投げ出して柔軟体操を行う。兄貴も目が覚めたようなので、追いかけてこでも

することにしたら。

兄貴の方を見ると、もう戦闘モードになっている。しつぽを横に振りながら、「おい、こつちに来いよ」と挑発してくる。

「この意気地なし！ おまえ、おれがこわいんだろ」

ぼくはにらみつけ、兄貴に向かって突進する。兄貴は全速力で逃げていく。ぼくも負けじと追いかける。追いついたところで、兄貴はこちらのおなかを足蹴あしげにして、顔にパンチを食らわせた。

遊びのはずなのに、手加減てかげんしてくれない。今度はぼくが全速力で逃げ出した。そのとき、テーブルにうつぶしてたおじさんが目を覚まし、こわい顔をして裏口のドアを開けた。思わず、ぼくは外に出てしまったんだけど、兄貴の方は吹きすさぶ風に

怖じ気づいたのか、台所の出口の前で立ち尽くしていた。

「出てけ！」

人間の言葉が分からない兄貴も、おじさんが本気で怒ってるらしいことは分かった。身を伏ふせるようにして、すごすごとおじさんの前を抜け、柿の木の前に出たところで、後ろのドアがバシンと閉められてしまった。

外は本当に寒い。兄貴とぼくはショックでふるえた。もうこのうちにいられないかもしれない。とぼとぼと庭を横断して、隣のうちの前まで行った。空気は冷え切って、身も心も凍りついてしまいそうだった。兄貴に話しかける元気もなかった。どうなると問いかけても、答えは返ってこないだろう。

顔を見合わせていると、裏口のドアが開いた。ぼくは走っていきたくなくなったが、まだ体が動かない。すると、髪の毛の短いおじさんが近づいてきて、ぼくの体に触れた。緊張してぶるつとふるえた。その手はゆつくりと、ぼくの頭と、ついで背中をなでている。

許してくれたんだなと思った。しばらくすると、凍りついていた兄貴も寄ってきた。おじさんは冷え切った兄貴の体もなでている。もう夜中に大暴れするのはやめようと思った。おじさんが振り返りながら、家の方に戻っていく。ドアを開けると手招きした。すると、兄貴が走って家の中に入った。ぼくも恐る恐る入っていった。

それから少し反省した。真夜中に大暴れしたのは、ずっとうちの中に閉じこもっていたからだ。寒くても天気の良い日は、外に出て走り回ろう。いくら親切なおじさんでも、凶に乗って甘えたりしてはいけない。

そう思いながらも、次の日の朝になると、晴れ上がっているだけに、なかなか出て行く気にはならない。そこで朝日の当たる出窓で夢見心地になりながら、考えるネコを演じてみることにした……。

人間の世界には「目は心の窓」という言葉があるらしい。ネコの世界には「耳は心の窓」という言葉がある。ネコの目は、外が明るくなるにつれ瞳孔が閉じていく。時計のない時代には、

ネコの目を時計代わりにしていたという言い伝えがあるという。だから、物の形をはつきり見るのは苦手だ。焦点しょうてんを合わすためには、首を傾けて調節するしかないのだ。かわいい子ぶったり、媚こびを売ってるわけじゃないからね。

と、そんなことを考えていると、空気を入れ換えるために、さっと部屋の窓が開けられた。ここから飛び下りられたらいいのだが、あいにく網戸があつて出られない。遠くで鳴いている鳥の種類を思い浮かべる。どうやって捕まえるか。食べたらどんな味がするかまで考える。足音を聞いただけで、だれが帰ってきたかだつて分かるんだからね。

そのとき、ぼくはただならぬ気配を感じた。おばさんが洗濯を干すために、台所のドアを開けたとき、ぼくと兄貴は外に向

かって突撃した。表の玄関の方には、ぼくらが以前、夜の寒さをしのいだ小屋があつた。しばらく見てなかったから心配になつた。そこにいたのは、極ごくネコ！ 母ちゃんと共謀きょうぼうして、ぼくら兄弟を追い出そうとしたあのオヤジだったのだ。それを見るやいなや、普段は口数の少ない兄貴が叫んだ。

「このドロボーネコ！」

ぼくらの鳴き声を聞きつけて、おばさんが玄関の方に駆けつけた。一緒に追っ払ってくれるものとはかり思っていたが、どうも様子がおかしい。極ネコに立ち向かう気をそぐために、兄貴の頭をなでている。抵抗できずに、兄貴はゴロゴロのどを鳴らし始めた。

「何でぼくらのなわばりに入ってきたんだよ！」

ぼく一匹で撃退するには、ちよつと手強い相手だ。威嚇するために、ガーカーうなつてやった。しかし、手応えがない。こりやどういふことなんだろう。よく見ると、相手は息苦しそうに、小屋の前で横たわっている。ゼーゼーいふ音まで聞こえてくる。行き倒れみたいである。

「おい、母ちゃんはどうした！」

前にも話したとおおり、この極ネコは母ちゃんと共謀して、ぼくら兄弟をここから追い出そうとしたのだ。相手はだるそうに顔を上げると、かすれたような声で言った。

「あのメスはどっかに行っちゃったよ……。病んだオスには用がないとき……。また、どこぞの若造に誘われて……。おなか膨

らましてるだろうさ」

そこまで言うのと、極ネコはまた玄関のタタキに横たわってしまった。また咳をしている。元気でないことだけは確かだ。

振り返ると、すでに兄貴の姿はなかった。おばさんに抱きかかえられて、うちの中に戻されたんだろう。すぐにおばさんが戻ってきて、ぼくも裏口の方に連れていかれた。

うちの中に戻されたぼくは、くやしくてカーテンを引っ張ったり、壁をこすつて爪とぎしたりした。母ちゃんの心を狂わし、ぼくらを追い出そうとしたくせに、体を悪くして戻ってくると、いかにも哀れな声を出して、おばさんに情けを乞おうとしてるんだから。

「まあ、そう怒るなよ」

先ほどまで気が立ってたくせに、兄貴は床に前足を伸ばして、何もなかったような顔をしている。毛並みが白くて上品だから、兄貴ながらもほればれするけど、ちよつと鈍感なんじゃないか。「おまえも年を取れば、あのおっさんの気持ちちが分かるようになるよ」

兄貴だって、ぼくより三十分ばかり先に生まれただけで、まだ一歳にもならないのに、大ネコおおみたいな口をきいている。おばさんはというと、極ネコの体をふいてやり、えさをやったり、湯たんぼの準備までしてるようだ。さすがに、うちの中には入れる気はないらしいが。

テーブルでは髪かみの短いおじさんがお茶を飲みながら、妹であ

るおばさんの話に耳を傾けている。

「この子たちの身と比べたら、私、放ほうっておけなくて」

「そうか。おれもさつき見たけど、友達ともだちが飼かってたネコに毛並みがそっくりなんだよ。あんなきつい目つきはしていなかったけどね」

それから極ネコは、かつてのぼくらのように、玄関前のプラスチックの小屋で、一日の大半を過ごすようになった。兄貴が言うには、あれでも一時は母ちゃんの連れ合いだったので、義理のお父さんなのだそうだ。

ネコのオスにとっては、連れ子はじゃまな存在で、噛かみ殺ころしてしまふこともあるんだから、それを父親扱いするのは変だと

思うのだが。それを人間は「ままちち」と呼ぶらしい。ママで父親だなんて、まったく紛まぎらわしい言い方だな。

兄貴は億劫おっくうがって、ストーブとかいう暖かい箱の前で、居ねむりばかりしている。ぼくは裏口のドアが開くと、庭に出て外気に当たることにした。寒くてびっくりするけれど、毛を奮ふるい立たせて進めば、外を歩き回れる自由に、ネコとして生まれた喜びを感じるのだ。いくら冷蔵庫の上に登っても、小鳥が留まってることはないのだから。

天気の良い日には、極ネコは日なたに移動してうつらうつらしている。こちらが声をかけても、目だけ動かすばかりで、にらみつけたり声を出したりしてこない。遠くを眺めながら、昔のことを思い出してるようだった。固いえさが食べられなくな

り、おばさんはやわらかい肉の缶詰かんづめを、極ネコに与えるようになった。あまりにおいしそうなので、半分食べかけた皿に顔を近づけたら、威嚇するどころか、笑ってるじゃないか。何か気持ち悪くなったけど、残りはいたできてしまった。

それから、極ネコは次第に物を食べなくなった。外は霜柱しもばしらも立つほどだから、小屋も玄関の中に移動していた。兄貴やぼくが近づいていっても、ぼんやり見ているだけで、心はどこかに飛んでいってしまったみたいだった。

その日は風もなく暖かなので、日に当ててやろうと、小屋も外に出して日なたぼっこできるようにしてあった。極ネコは小屋の中に置かれた湯たんぽの上で、うつらうつらしている様

子だった。「寒くないから」と兄貴を誘って、ぼくらも庭で追いかけてっこしていた。

昼過ぎになって、外出していたおじさんの声がした。ぼくはうれしくなって通りに駆けていくと、見たことのある男の人が横にいた。おじさんの友達で、くまモンのシャツをいつも着ているくまモンさんだった。でも、この前来たときと何か様子が違ってる。いても立ってもいられないみたいで、門を入るとおじさんよりも先に、玄関の方に走っていった。

「イオ、イオ、イオ」

それはくまモンさんが以前飼ってたネコの名前で、病気で数年前に死んでしまったという話だった。それなのに、くまモンさんは極ネコの毛並みがイオに似ていると聞いて、駆けつけて

きたのだった。

くまモンさんは手を差し出した。すると、知らない相手には「ガー」と威嚇の声を出していたのに、抵抗することもなくくまモンさんに抱かれているのだった。

「間に合ってよかったな」

おじさんが声をかけると、くまモンさんはうれしそうな顔で、極ネコの顔をこちらに見せた。不思議なことに、うれしそうに目を細めて、口もとが笑っている。そして、かわいらしい声で「ニャー」と鳴いた。

極ネコはそのまま動かなくなった。くまモンさんは抱きしめたまま、涙をこらえている様子だった。兄貴とぼくは呆気にとられて、その場面をじっと見上げていた。本当は極ネコとイオ

は関係なかったかもしれない。でも、くまモンさんはイオに再会できたと喜んでいたし、母ちゃんの連れ合いだったネコが、赤ちゃんみたいに抱かれて息を引き取ったのだから、ぼくたちもしんみりした気持ちになった。

長い冬が終わった。ずっとうちにこもってばかりいたから、久し振りに外の空気が吸いたくなくなった。隣のうちの桜が咲いたというので、庭でお花見をすることになった。椅子を出しておばあさんを座らせると、髪の毛の短いおじさんはあぐらをかいて、酒とかいう水を飲んでいた。

兄貴はゴザの端で丸くなって、うつらうつらしている。寝てばかりいるから、ネコなんて名前と呼ばれるんだ。ぼくはおば

さんが持ってきたおつまみを、さっきからずっとねらっていた。それは乾いた肉の塊に、何やら刺激のある粉を混ぜた物だった。「見事な桜ね。若い頃は春が来るのが好きだったのに、この年になると何だかつらくなるの……」

「お母さん、今日はまともみたいね」と、おばさんは不思議ふしぎそうな顔して言っている。そのとき、脇の道をおめかした女と男の子が手をつなぎ、小学校の方から帰ってきた。母親は着物姿で、息子は小さなスーツに黒いランドセルを背負っている。

「入学式か……」

おじさんがつぶやいた。おれにもあんな子供がいたら、と思っただろうか知らない。その言葉を聞いた途端、おばあさんは立ち上がると、何か思い出したようにそわそわしている。

「今日は入学式なの。大学に行かなくちゃ。〇〇田大学に」
「何言ってるんだよ。それはおれの大学だよ」とおじさんは言い返したのだが、おばあさんは、おまえなんか大学に行つてない。私は大学で一番だったんだからと言い張つて譲らない。しまいには「〇〇田、〇〇田」と校歌まで歌い出した。

すると、おじさんの方も負けてはいない。お母さんが行ったのはネコダ大学だろと言ひ返し、「ネコダ、ネコダ、ネコダ、ネコダ、ネコダ、ネコダ、ネコダ」と節ふしをつけて歌う始末しまつ。

「お兄ちゃん、はずかしいからやめてよ！」

おじさん、酔よってるなとぼくは思った。そつと忍び寄ると、おつまみの肉をかつさらつて、ビニールの包みを噛かみ破つた。「何だ、こりゃ」と吐はき出したところ、首根っこをつかまれて抱かか

えられてしまった。おまえはこれでも食つてると言われて、口の中に入れられたのは、ネコ用のお菓子で、何ともいい匂いがある。どうやら、これがマタタビというものらしい。こつちま
でへべれけになつてしまった。

酔よいがさめた頃、兄貴がぼくに尋たずねた、どうしておまえだけ、人間の言葉が分かるんだと。そんなこと言われても分からない。だれか教えてくれないかというので、人間には学校というものがあるかと答えておいた。

「ネコの学校はどこにある？」

「そんなもの、あるのかな。うちは母ちゃんが行方ゆくえ知らずだし、父ちゃんは大それだか分からないし、ママチチはあの世に逝いち

「やっつたし」

それからというものの、おばあさんが大学に行きたがるように、兄貴は学校へ行きたがった。そこで、久し振りに丘の上にある小学校へ、兄貴をつれて行ってみることにした。大きな建物の前の庭で、新入生の子供たちが、白と赤の帽子にシャツと短パン姿で並ばされていた。けたたましい音楽が鳴り出すと、それに合わせて両手を振りながら、行進させられている。

「なんか真似してるだけだな。つまらない。あんなことして頭がよくなるとは思えない。第一、ネコが出てこないんだから、おれにとっちゃ、何の役にも立たないよ」

わざわざネコに案内させておいて、それはないだろと思った。ただ、人間は機械みたいに動く練習してるだけじゃない。あの

建物の中で勉強してるんだろうと言ったら、兄貴は走って学校の門の中に入ってしまった。

こんな大きな建物の中に入るのは初めてだった。天井の明かりがついていないから、一列に続く廊下は昼でも薄暗い。兄貴は長い階段を上っていく。後を追って上ると、廊下に沿って同じような部屋がいくつも並んでいた。女の人の声が聞こえてくる。窓は開いているのだが、下からでは中は見えない。

ところが、一つの教室の後ろの戸が、少しだけ開いていた。止めようとしたんだけど、兄貴は部屋に入ってしまった。ぼくはこわくて、入口から恐る恐る中をのぞいた。子供たちがネコ、ネコとしゃべる声でした。兄貴は机の間をぬって進んでいく。ずっと授業をしていた女の先生が、大きな声で怒り出した。そ

れに對して、子供たちはどつと笑い出した。

「キーン・コーン・カーン・コーン・キーン・コーン・カーン・コーン……」

けたたましい鐘かねがあたりに鳴り響ひびいた。この世の終わりを告げる時が来たのかと思つた。

そのとき、後ろからだれかがぼくの背中をつかんだ。太つた男の子だった。爪を立てて暴れたら、今度はしつぽをつかまれた。図体ずうたいが大きなくせに、思いやりというものがない。学校では一体何を教えているんだ。しつぽでぼくを引き回すものだから、目が回つて吐き気がした。

兄貴を助けるどころではなかつた。しつぽが引きちぎられそうになつた。階段の手前で投げ出されたので、一目散いちもくさんで階段を

駆け下りた。後ろからは、虫のように子供たちがわき出してきた。

「あつ、あそこにもネコがいるぞ！」

ぼくは兄貴のことは見捨てて、建物の外に出ると、そのまま草むらに向かつて駆けていった。

ぼくは一匹でうちに逃げ帰つた。しばらくしても、兄貴は戻つてこなかつた。日が西に傾いて、えきの時間になつても……。

何か悪いことでも起きたのだろうか。草むらの途中まで行つたが、足がすくんでしまった。今まで何とも思つていなかった人間の子供が、地獄じごくに住む鬼か何かのように思えてきた。

あたりが薄暗くなつた頃、ようやく兄貴は戻つてきた。しか

も、歩き方がよろよろしている。追いかけられて、石でもぶつ
けられたのだろうか。

「もう会えないかもしれないって思ってたよ。どこか具合でも
悪いのかい」

「いや。あそこには食べ物がたくさんあるぞ。子供たちが残っ
た牛乳やら肉やってくれるんで、食べ過ぎて歩くのもおっくうに
なっちまったんだ。おまえも何か食べさせてもらったんだろ」
ぼくは聞いているうちに、ばかばかしくなってきた。心配し
ただけ余計腹が減ってしまった。もう学校なんてこりごりだ。
同じネコなのに、どうしてこんなに扱いが違うんだろう。

ところが、兄貴はちつとも懲りた様子がない。うちの中に入
ると、おばさんがいつものように、乾いたえさを出してくれた。

ぼくが夢中で食べていると、兄貴は食欲がないのか、おなかを
床に投げ出している。

「人間のえさはもつとおいしいぞ。こんな日なたくさい物、よ
く食べるな。おなかがすいたら、あしたも一緒に学校へ行こ
う！」

いい加減、ぼくは腹が立った。兄貴を小学校に連れていった
ばかりに、しっぽを持って振り回されるし、こちらがどれだけ
心配していたかも知らずに、えさに釣られてまたのこのこ出か
けていこうというのだから。

「兄貴は食べるために生きてるんだろ！」

「何言ってる。おまえこそ、愛想あいそがないから何ももらえなかつ

「たんだ！」

ぼくは我慢ができなくなった。いつものように、兄貴はこちに来いとしつぽを振った。それを合図にぼくは兄貴に飛びかかった。普段ならそこで首根っこをつかまれ、投げ飛ばされるころだった。ところが、いつの間にか兄貴と互角ごかくの体になっていた。

人間たちは二匹のけんかを面白がってる様子だった。特に髪の毛の短いおじさんは手をたたいて喜んでいいる。ぼくは兄貴を追い回した。うちの中を何周回ったろうか。しまいには、兄貴は紙袋の中に逃げ込んだので、ぼくは袋の口を後ろ足で押さえると、兄貴を袋の中に閉じ込めた。身動きできなくなった兄貴の頭やおなかを、思う存分ぞんぶんなぐってやった。すると、椅子に座っていたおばあさんが、変な歌をうたいだした。

「山寺おしょうの和尚さんは、毬まりは蹴りたし毬はなし。猫を紙袋かんぶくろに押し込んで ポンとけりやニヤンと鳴く……」

いい気味だと思った。兄貴といっても、三十分早く生まれただけだし、体重だつて大して変わらなくなっていた。ふさふさした白い毛をしている分、兄貴の体が大きく見えただけなんだから。

その夜、兄貴はテレビの後ろで丸くなってねむっていた。目の上ののプライドをつぶされて、気が弱くなったのだろうか。ちよつとやり過ぎたかなと反省した。

次の朝、えさを食べたあと、軽く運動したくなった。兄貴に声をかけたが、ねむそうにあくびして寝てしまった。そこで、

一匹で何かして遊ぶことにした。テーブルの下に、赤い色したビニール袋が落ちていた。この色は動物の血を騒がせると信じられている。牛に赤い布見せて突進させるって見世物の、スペインとかいう国にあるらしい。おじさんが話していたことを思い出し、ぼくもビニール袋に突進してみた。

ところが、少々勢いがつきすぎて、袋の手の部分に頭が入ってしまった。もがけばもがくほど首に食い込んでくる。

「助けてくれ！」

叫んだけど、兄貴は知らんぷりして寝ている。走ればそのうち外れるかもしれない。わけも分からずもがいたが、走れば走るほど、締めつけられて息苦しくなってきた。

騒ぎを聞きつけて、おじさんが二階から駆け下りてきた。大

学の授業は午後からで、その日は寝坊していたのだった。もし、寝坊せずに出勤していたら、おばあさんもおばさんもない。うちの中で、ぼくは縛り首の刑に処せられていたかもしれない。それも自分自身のせいだ。

おじさんは血相を変えて、ぼくのことを追いかけてきた。こんなこわい顔してるのを見たことがない。気がつかないうちに、ぼくはおじさんの気に障ることをしでかしたのか。ぼくはあちこちぶつかりながら逃げ回った。頭から何度も火花が出た。袋が目にかぶさってきて、ついに身動きできなくなり、赤い袋に手をかけられてしまった……

どんなお仕置きが待っているのかと思っただが、おじさんはいつもの笑顔に戻っていた。赤いビニール袋を外すと、おびえて

いるぼくを抱きしめてくれた。

「おまえ、何か後ろめたいことがあるんじゃないか」

さすが、大学とかいう学校の先生ともなると、ネコの気持ちまで分かるらしい。寝ぼすけとばかり思っていたが、少し尊敬したくなった。授業時間が少なくて、ネコ助けもできるなんて、大学って学校は、案外社会の役に立ってるのかもしれない。

昨日兄貴を袋だたきにしたから、きつとバチが当たったんだと思った。騒ぎを聞きつけて、兄貴も寄ってきたので、「ごめんな」と謝ったら、「何のことだい？」っていう返事。とぼけてるといふより、単に忘れてしまったのかな？

ある夜、いつものように、部屋の奥にあるガラスが光ってい

た。テレビという名の窓だった。めずらしいことに、そこにはネコが映っていた。鍋を持ったおばさんが出てきて、黒いネコに肉の塊をやっている。それを見た兄貴は駆け寄るなり、釘付けになってしまった。

兄貴は自分も肉をもらおうと、そわそわしていたのだが、テレビの中のおばさんは、兄貴の方には見向きもせず、うちの中に入ってしまった。そのネコはかわいい瞳の女の子だった。食べ終わると、こちらに流し目を送っている。兄貴はよだれを垂らして、頬にキスしたのだが、女の子の方はつんとすましたままだ。

見境を失った兄貴は、前足でなでようとしたり、体をすりついたり、ネコで声を上げたりした。反対側から抱えようとし

て、テレビの後ろに回った途端、女の子の姿は消えてしまった。「おかしい、おかしい。どこ行つたんだ、カワイコちゃん！」気の毒になつたので、兄貴に言つてやつた。「それはテレビっていう機械なんだよ。厚みあつのないネコなんかいるわけないだろ」

兄貴がテレビの前に戻ると、そこには何も映つていない。番組が終わつたので、おばさんがスイッチを切つたからだつた。

兄貴は諦めあきらきれずに、暗くなつたテレビの前に座り込んでしまつた。

「おれはまだ、女の子とデートしていかない。女の子の気持ちに分からないから、相手にしてもらえなかつたんだ」

そこで、ぼくはテレビというものが、ここにいるネコを見せ

てるのではなく、居ながらにして、ほかの場所にいるネコが見られる窓だということを説明した。

「ネコだけじゃないんだよ。食べられる生き物や、ネコを食べってしまう生き物、遊びに行きたい草原くさはらや森、いろんな人間が住む町、海の向こうにある国、この星の外の世界まで見られるんだから」

『『何でも窓』ってどういうわけか』

話がどこまで理解できたか分からないが、それからというもの、兄貴はテレビがつくたびに駆け寄ると、窓に映るものを食い入るようになるようになった。ネコが出てこなくても、よその町や野山の風景が出てくるだけで、ニャーニャーかんたん感嘆の声を出すようになった。

「テレビはおもしろいな。こんなおもしろいもの、どうして早く教えてくれなかったんだ」

「兄貴は人間の言葉が分からないと思っただからさ」

「これは学校のようなものだ。これこそネコの学校だ」とご満悦まんえつの様子。

ところで、兄貴がテレビで勉強するようになったので、大学で教えてるおじさんも、新しい研究がしたくなつたらしい。ネコマネ語を使い始めたのだ。「おはようだニャー」「おなかすいたニャー」こちらの気持ちさつを察してくれてるんだらうけど、「ニャー」をつけさえすればネコの言葉しゃべってるつもりになるなんて、所詮人間しよせんはサル真似しかできないんだね。

あとがき

ペット好きには「イヌ派」と「ネコ派」がいる。僕は幼い頃からイヌしか飼ったことがなかった。散歩したり、イヌと駆けっこしたり、少年にはイヌの方が合っているのかもしれない。イヌは集団生活を送るから、群れの中での上下関係に従って行動する。主人だと思えば、イヌはひたすら飼い主に尽くそうとする。呼べば必ず飛んでくる。気持ちがまっすぐな体育会系の男子のようだ。イヌが好きな人は、相手を従わせるのが好きなナルシシストが多いと、かつて知人が言っていた。

文人はむしろ、ネコの方を好むようだ。普段は勝手に遊んでいてくれる。こちらが呼んでも無視して行ってしまふ。それな

のに、こっちが忙しいときに邪魔しに来る。言うことを聞かないくせに、自分が甘えたくなると、とことん甘えてくる。こちらの心を読むのにも長けていて、目を見るだけで、ネコがどんなことを考えているか分かる。そうした点で、ネコの方がよっぽど人間くさいのである。

ネコを描いた小説としては、夏目漱石の『吾輩は猫である』がある。夏目家に迷い込んできた黒猫がモデルになったと言われる。雑誌『ホトトギス』に執筆したところ、好評だったので書き継がれた。当初から全体の構想を立てて書かれたわけではない。想像力のおもむくままに書かれたこの作品を、国語学者の時枝誠記は連歌に喩えている。ただ、ネコを主人公にして語らせるスタイルは漱石の独創ではなく、ドイツの怪奇小説家エ

ルンスト・テオドル・アマデウス・ホフマン Ernst Theodor Amadeus Hoffmann の『牡猫ムルの人生観』おすねこ Lebensansichten des Katers Murr によるのだという。

亡き父は実家でネコを飼っていて、生前出版された詩集の中でもよくネコを描いていた。ある夜、父が子ネコを拾ってきたが、母は土足でうちに上がってくるネコを嫌って、父に子ネコを捨ててくるように言った。その出来事に関して「妻が死んだら、可愛いのをみつけて、七匹ぐらいは飼ってやろう。その夜は、寢床の中で棄てて来て終った仔猫のことを考え、猫と住まう幻の住居を闇に描いて、何時までも眠られなかった」と書いている。

イヌしか飼ったことがなかった我が家で、ネコを二匹飼うようになったのも、庭で子ネコが生まれてしまったからで、漱石のうちには黒猫が迷い込んできた事情と似ている。そこで、棲みついた二匹の子ネコ、白と茶のまだらの兄ネコと、茶のシマシマの弟ネコをモデルに、弟ネコの視点で語らせる小説を書いてみようと思ったのである。ネコの生態を観察する中で、ネコと人間、またネコ同士のコミュニケーションの面白さを、フィクションを交えて描こうと思ったのが創作動機である。

また、漱石の執筆スタイルにならって、全体の構想をあえて立てず、自由気ままに創作してみることにした。ネコの子供時代を描きおえたところで、一区切りがついたので筆を擱くことにする。また新たな創作意欲が湧けば、ネコたちの後日譚を書くことにしよう。

くことにしよう。

二〇一七年九月十日

高野敦志